



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 1995, 76: 309-324

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48453>

RIGHT:

彙 報

1994年（平成6年）1月～1994年（平成6年）12月

研 究 状 況

I 班 研 究

日 本 部

近代東アジア世界の構造連関

班長 山室 信一

東アジア地域に展開してきた諸民族の相互交渉とそれによる相互規定の諸側面を総体としてとらえる研究報告を重ねることによって、次第にこれまでの一国史的視野からは捉えきれなかった歴史的特徴が見えてきた。また、今年度は東方部からの参加者を得て日中朝のトライアングルについて議論を進めたほか、たとえば上海などの拠点都市において東アジア世界がいかに構造的につながっていたかなどについても検討を重ねた。

班員 飛鳥井雅道 石川禎浩 落合弘樹 齋藤希史 佐々木克 塚本 明 狭間直樹 水野直樹 森時彦 安富 歩 山室信一 山本有造
1994年

- 3月7日 上海 — 偽りの都市と近代日本
山室信一
- 4月18日 近代東アジアの出発点 — 万国並立と一統垂裳の世界
山室信一
- 5月16日 日本の「アジア主義」と朝鮮問題 — 1926・27年のアジア民族会議をめぐって
水野直樹
- 5月30日 還流する文学 — 近代初頭における日中文学交渉
齋藤希史
- 6月13日 明治前期の外征論と東アジア
落合弘樹
- 7月4日 世界史のなかの中国経済
山本有造
- 10月3日 上海の金融市場 — 吉田政治の「支

那観」

安富歩

10月17日 征韓論の前提

飛鳥井雅道

11月21日 維新思想の連鎖

山室信一

12月5日 近代日本の於ける印度への関心

古屋哲夫

「大東亜共栄圏」の経済構造

班長 山本 有造

先の山本班『「満洲国」の研究』の終了をうけ対象を「大東亜共栄圏」に広げようとしたものであるが、当面は経済史に分析対象をしぼり、intensiveな共同研究を行いたい。できれば、いずれ予定する『「大東亜共栄圏」の研究』のための準備会的性格をも持たせたいと考えている。現在、水曜日隔週に研究会を開いている。

班員 山本有造 水野直樹 安富歩（以上所内）
木村光彦（帝塚山大）近藤正己（近畿大）平井広一（北星学園大）松本俊郎（岡山大）山田 敦（大阪市大・院）

1994年

- 1月19日 日本銀行金融研究所所蔵「金融関係」資料について
安富
- 2月23日 The Aftermath of Liberation — Economic Changes in Divided Korea, 1945—49 —
木村
- 4月20日 ポーレイ報告書（満洲編）について
松本
- 1910年代台湾における茶業と茶金融の展開
山田
- 5月18日 ポーレイ報告書（北朝鮮編）について
木村
- 「満洲国」生産力のマクロ的研究 I
山本

人 文 学 報

6月1日	ポーレイ報告書（日本編）について	山本	1994年	もはかることとなろう。
	日本植民地台湾人資本	洪詩鴻	4月27日	漂荒紀事注釈原稿検討 齋藤
6月15日	日本植民地時代末期の台湾経済情勢		5月11日	同 平田
	にかんする資料について	山田	5月25日	同 谷川
	満鉄の資金調達と資金投入	安富	6月8日	同 米井
7月6日	アジア研究会「東アジアの経済・社会発展の基底」について	井村哲郎	6月22日	同 木村
	戦時下樺太経済の概観	平井	7月6日	同 生田
9月28日	訪韓報告	木村	7月22日	同 松田
	昭和製鋼所の施設破壊について	松本	7月23日	同 齋藤
10月26日	戦時期『朝鮮総督府統計年報』について	水野	8月31日	同 平田
	太平洋戦争末期の満州国インフレーション	安富	9月1日	同 谷川
			9月2日	同 米井
			9月28日	同 木村
11月9日	1945年1月満鉄運賃改正について		10月19日	同 生田
		安富	11月2日	同 松田
	「満州国」生産力のマクロ的研究Ⅱ		11月30日	同 齋藤
		山本	12月14日	同 平田
		山田	12月26日	同 谷川
12月14日	訪台報告		12月27日	同 米井
	日中戦争と台湾籍民	近藤		班員 飛鳥井雅道 齋藤希史（以上所内）木村

崇 松田 清（以上総合人間学部）平田由美 米井
力也（以上大阪外大）谷川恵一（高知大）生田美智子

異言語接触の場としての19世紀日本

班長 齋藤 希史

本研究班は1994年4月に発足したが、その母体となったのは、前年度に終了した共同研究「文学から何が見えてくるか」（班長 飛鳥井雅道）内に設けられた『漂荒紀事』会読部会である。ヨーロッパ文学の初めての翻訳であるこの書物の会読を通じて、『漂荒紀事』のみならず、幕末から明治期にかけて大量に出現した翻訳、外国語学習書、海外情報書などが、それまで独自の発展を遂げてきた日本の言語文化に対してどのような意味をもったのか、そして江戸から明治へかけての言語文化のドラスティックな変容にそれがいかなる役割を果たしたのかへの関心が構成され、本研究班の発足となった。

1994年度の例会は、会読部会の成果である『漂荒紀事注釈』出版のための、原稿検討にあてられたが、次年度より、上記テーマに沿った形で、さまざまな視点から19世紀日本における異言語接触の諸相を論じてゆく予定であり、それにとまって班員の拡充

転換期における個人と組織 班長 佐々木 克

歴史の転換期において、個人がどのように生活し、いかに生き、あるいは生きざるをえなかったのか、有名、無名の群像の、ライフスタイルを明らかにすることを、この研究は第一の課題としている。班員各自が、一人あるいは複数の人物を担当することにしたが、当面对象とする人物は、政治家、志士、公家、大名、幕臣、学者、豪農、老農、村役人、そして侠客、女性等々。多様・多彩な群像が選ばれた。この研究は、限られた史料と時間的制約があるため、かならずしも対象とする個人の伝記的研究をめざすものではない。むしろ転換期における社会ならびに組織と個人との関わり、という問題に比重を置いている。さらにもう一つの問題は、まとめの段階での課題でもあるが、個々人の生活史を集合し、検討を加えることによって、その時代の社会のイメージと

断面を、浮かび上がらせる事ができると考えており、この課題をも、常に心に留めて、研究を進めて行くことにしたい。なお転換期のある時期と特定していないが、班員の研究領域と問題関心の関係から、主に明治維新期が中心となる。

班員 佐々木克 飛鳥井雅道 落合弘樹 塚本明（以上所内）藤井譲治（文学部）青山忠正（大阪商業大）池田 宏（滋賀県立図書館）奥村 弘（神戸大）小股憲明（大阪女子大）勝部真人（和歌山高専）鈴木祥二（名古屋大）鈴木栄樹（京都薬大）谷山正道（天理大）辻ミチ子（京都文化短大）原田敬一（仏教大）母利美和（彦根城博物館）藪田 貫（関西大）手島一雄 岸本 覚（以上立命館大学院）三沢純（広島大学院）沈 箕戴（京大院生）

1994年

1月21日 幕末期の幕府の朝鮮政策と機構の变化 沈
2月4日 幕府期の海防と「民政」 岸本
5月20日 近世後期の「民意」表明と運動組織 谷山
6月10日 明治天皇の巡幸と国民統合 佐々木
6月24日 近世後期京都町代古久保家の人々 塚本
10月7日 『米欧回覧実記』における欧米農業への認識 勝部
10月21日 大久保政権の地方出張官員復命書と密偵報告 落合
11月4日 斎藤拙堂考―幕末政治社会と「志士」― 鈴木祥
11月25日 相州預所における種痘 岸本
12月9日 明治3年の大学事件と大学別当松平慶永 鈴木栄

近世前期における政治的主要人物の居所と行動

班長 藤井 譲治

1990年4月から3か年の予定で始まった本研究班は、期間を1年延長し、1994年3月を以て終了した。研究テーマに即して報告・討議された4年間の共同研究の成果は、1994年3月に『近世前期政治的主要人物の居所と行動』（京都大学人文科学研究所調査報告第37号）として刊行した。

班員 藤井譲治 塚本 明（以上所内）杉田善雄（京大研修員）宇佐美英機（京都橘女子大）藤田恒春（関西大）横田冬彦（神戸大）母利美和（彦根城博物館）宮本裕次（大阪城天守閣）

1994年

1月17日 報告書論文検討会 全員
2月7日 報告書論文検討会 全員
3月28日 総括 全員

文学からなにが見えてくるか

班長 飛鳥井 雅道

研究班は1994年3月に終了したが、本研究班では、班員の研究報告を行う本報告部会と並行して、日本最初の「翻訳小説」である『漂荒紀事』の会読部会も行なわれた。

両部会に共通しているのは、ともに日常性からの「異境」「異界」を意識していることであり、本報告も、会読部会も、いわゆる「近代」文学論には立っていない。またあえて、意識的に、日常からの脱出がどのように文学のテーマとなってゆくか、そしてそれがいかに表現されてゆくに、力点を置いた報告が積み重ねられた。日本の近世・近代が対象の中心になっていることは事実だが、東アジア、さらにロシア・フランス・ドイツなどの地域における文学の転換・変貌も報告の主要テーマの一つとなった。

また、本報告と会読してそれぞれの報告書を作成する予定で、ひとまず本報告の成果が『人文学報』特集号として先に刊行されたが、会読部会にはさらに集約的な検討が必要であり、若干の日時を要することとなる。

1994年

2月2日 『漂荒紀事』会読 齋藤
2月9日 報告書打ちあわせ 全班員

班員 飛鳥井雅道 宇佐美齊 大浦康介 落合弘樹 佐々木克 鈴木啓司 富永茂樹 藤田隆則 齋藤希史（以上所内）池田浩士 加藤幹郎 木村崇三原弟平 若島 正 松田 清（以上総合人間学部）須田千里（光華女子大）谷川恵一（高知大）林完枝（大阪市大）米井力也 平田由美 藤元優子 松村耕光（以上大阪外大）堀田桂子（民博大学院）濱田秀（神戸太大学院）生田美智子

西 洋 部

象徴主義の研究

班長 宇佐美 齊

4年間の予定で1993年4月より発足したこの研究班の目標と活動内容の概略は、以下の通りである。

フランスを中心とするヨーロッパの文学テキストを主な対象として、象徴主義が提起した問題とは何かを問うことから始める。その際、音楽・美術・演劇などの諸芸術との関わり、政治や社会の変動が及ぼした影響、思想史的なコンテクスト、および中国・日本など非ヨーロッパ諸国との比較対照の視点をも重視する。ついでそれらの諸問題がその後どのような展開を遂げたかを問う。特に20世紀初頭のアヴァン・ギャルド芸術を、象徴主義のひとつの展開、結実あるいは変貌として見とどけたい。したがって時代区分としては、19世紀中葉から1920年代までを視野に収める。

この1年間は、なによりも共同研究の磁場を形成することをめざして、各班員の個人研究と象徴主義との接点を模索することに重点を置いた口頭発表がなされた。

班員 宇佐美齊 大浦康介 齋藤希史 阪上 孝 鈴木啓司（以上所内）小林 満 田口紀子 吉田城（以上文学部）多賀 茂 松島 征（以上総合人間学部）柏木隆雄 上倉庸敬（以上大阪大）山田広昭 吉田典子（以上神戸大）内藤 高 山路龍天（以上同志社大）柏木加代子（京都市芸大）小西嘉幸（大阪市大）小山俊輔（立命館大）島本 浣（手塚山学院大）丹治恆次郎（関西学院大）ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大）中井敦子（徳島大）原田邦夫（愛知県大）丸岡高弘（南山大）三野博司（奈良女子大）

1994年

- 2月21日 文学と建築 — ZolaのLe Ventre de ParisとLa Curée — 中井
- 3月28日 映画における物語とリアリティ 上倉
- 4月18日 Verlaineの祝祭性 小山
- 5月9日 魔術的サンボリスム — オカルティズムの認識論的考察 — 鈴木
- 5月23日 ポール・ゴーガンの言語作品について 丹治

- 6月6日 能における「象徴」 — コロス拡充との関連 — 藤田
- 6月20日 神経症と文学 — フローベールからブルーストヘー — 吉田城
- 7月4日 欲動と言語 — 詩的言語への一視点 — 原田
- 9月26日 象徴理論についての一考察 大浦
- 10月17日 象徴の場としての無意識 — ハルトマン、ヘルムホルツ、実験音声学 — 多賀
- 11月14日 Correspondances, Analogie universelle, Synesthésies, Symbolisme 宇佐美
- 12月5日 Segalen, Debussy et le silence ドゥヴォー
- 12月19日 コンピューターで何ができるか — Discotextによる基礎作業の試み — 小西

コミュニケーションの自然誌

班長 谷 泰

この研究班は、おもに社会的コミュニケーションの現場資料のミクロな分析をつうじて、言語だけでなく、身振り、表情など言語外的行為表象によってなされる行為表象のレフェラントの階層性、自己言及を含めた指示作用、意味連関性推論、そして社会的行為としてもつ力などを記述する、より一般的な概念枠組みを提出し、われわれの社会的コミュニケーションの基本的理解を深めることを目的として、組織された。まず手はじめに、ベートソン、ゴフマン、そしてザックスなどに代表される、それぞれにことなる先行のアプローチの位置づけがなされた。ついで、具体的な作業に移り、会話場面をVTRによって記録し、分析資料を蓄積する作業がなされるとともに、それぞれ、霊長類学、社会人類学、社会学、民族音楽学などの専門分野から、これら収集された資料の具体的分析にもとづく報告がなされた。そこでおもに取り上げられた問題は、チンプと人とのコミュニケーション装置系の差異、自己言及性と論理階型、協調性と共有知識の可能性、含意を方向付ける装置としての技法といった問題が議論の対象となっ

た。ところで、後に記す1994年度以降の共同研究「コミュニケーションの自然誌Ⅱ」の項にのべているような理由によって、この研究会は、さらにもう一ターム延長することで、より完全な成果とすることになった。ただこれまでの成果として、この関連で収集した会話場面を中心としたVTR資料等で、当該研究に重要と考えられるデータに、分析したコメントを付して収録した資料集を、人文科学研究所調査資料集の一部として発刊することにして、現在その編集にあたっている。

班員 谷 泰 田中雅一 藤田隆則(以上所内)
細馬宏道(理学部) 菅原和孝(総合人間学部) 北村弘二(弘前大) 木村大治(福井大) 串田秀也(大阪教育大) 高畑由起夫(鳴門教育大) 野村直樹(名古屋市立大) 沢田昌人(山口大) 野村雅一(国立民族学博物館) 早木仁成(神戸学院大) 深尾葉子(大阪外大) 水谷雅彦(神戸大) 宮脇幸生(大阪府立大)

1994年

1月24日	植物名と言語行為	木村
2月14日	「誠実性」再考	水谷
3月14日	打ち合わせ会	全員

コミュニケーションの自然誌Ⅱ

班長 谷 泰

本研究班は、先行する研究班「コミュニケーションの自然誌」の延長である。班長が3年後に定年になり、新たな研究会を発足するのも可能ではあるが、最後の年度は報告書のまとめに時間を費やすために、実質的には2年しかない。しかも身振り、表情、言語などを通じた社会的なコミュニケーションの運用の諸相を、具体的なデータのミクロな分析を通じてあきらかにし、それらの適切な記述のための一般性をもった概念枠組みを析出しようという、この種の研究は、なお新しい研究領域であるために、いまだ道半ばといった状態である。そのようなこともあって、先回の研究データの延長という意味を含めて、同じテーマにⅡを付し、より一層の完成を期すことにしたわけである。そしてこの機会に、あらたな班員として、理論言語学の専門家をふくめた。

ところで、今期は、ひとつには霊長類学の方面から、言語との係わりで、霊長類の音声コミュニケー

ションについての詳細な報告がなされて、ヒトとの連続性と非連続性が、新たな視点から議論された。また言語運用にかかわる問題として、命題態度表現事態認知スキーマ、また会話分析の面からのトピックス形成、含意推論、また電子ネットワークにおいて顕著にあらわれるオーサー問題等が提起された。来年度からは他の問題をふくめて、記述概念のつめに移る予定である。

班員 谷 泰 田中雅一 串田秀也 藤田隆則
(以上所内) 細馬宏道(理学部) 菅原和孝(総合人間学部) 北村弘二(弘前大) 木村大治(福井大) 高畑由起夫(鳴門教育大) 野村直樹(名古屋市立大) 沢田昌人(山口大) 野村雅一(国立民族学博物館) 早木仁成(神戸学院大) 水谷雅彦 定延利之 山森良枝(神戸大) 宮脇幸生(大阪府立大)

1994年

4月25日	言及世界と話者の命題態度	山森
5月9日	表情進化のメタメッセージ仮説	金沢(ゲスト)
5月23日	事態認知スキーマについて	定延
6月13日	規則性・情報・レリヴァンス	木村
6月27日	トピックはいかにつくりだされるか	串田
9月12日	想定相互顕在性創出装置について	谷
10月17日	サルは言葉をしゃべっているか	正高(ゲスト)
10月31日	コンピュータ・ネットワーク者にとっての読者像	細馬
11月14日	縮図的に示された時間	野村(直)
11月28日	コミュニケーションの自然誌からコミュニケーションの政治学へ	田中
12月12日	サルはなぜ声を出すのか	高畑

儀礼的暴力の研究

班長 田中 雅一

1990年度より4年間続いた当共同研究班は、個々人の報告を終え、1995年度に、『暴力の人類学』と題し刊行予定の論文集のため各自執筆中である。本書の構成は、そのまま当共同研究班の暴力に対するアプローチを示しているもので以下に紹介する。第一部は、より理論的、学際的な視点からの暴力につい

ての論文から成り、本書の序論を構成する。第二部はフィールドにて直接調査、体験した暴力現象を取り扱う。第三部は宗教儀礼に現れる暴力で、来世または現世での再生手段として位置づけられる暴力を考察の対象とする。第四部では歴史的な文脈の中で暴力の性格の変容を主として考察する。以上が研究会で到達した暴力への視点であり、今後さらなる深化を予定している。

主体構築の文化的特質 班長 田中 雅一

本研究班では、1) 近年注目されつつある主体(subject)や自己(self)、行為者(actor)、パーソン、エージェント、個人(individual)、アイデンティティ、情動などの概念に着目し、そうした概念の学説史上の背景と意味を探り、2) こうした諸概念の民族誌記述(とくに自省的・実験的民族誌と呼ばれるもの)における有効性などを批判的に検討するとともに、3) 通文化的観点から参加者の専門とする地域の主体や自己などの概念の特徴を考察することを目指す。初年度ということもあり、班長の問題提起を受けて、さまざまな報告がなされた。またシンガポールから二人のゲストを招いて公開講演を開いた。

班員 田中雅一 谷 泰 藤田隆則 根布厚子(以上所内) 松田素二(文学部) 菅原和孝(総合人間学部) 栗本英世 田辺繁治 林 勲男(以上民博) 小田 亮(桃山学院大) 春日直樹(奈良大) 川村邦光(天理大) 窪田幸子(大手前女子大) 棚瀬慈朗(龍谷大) 富山一郎(神戸市外大) 西井涼子(東京外大) 渡辺公三(立命館大)

1994年

4月18日 Refining the Dead: Death and Ritual Pollution among the Chinese in Singapore

Tong Chee Kiong (ゲスト)

5月16日 人類学の主題としての主体・主題としての人類学者の主体 田中

5月30日 ブッシュマンの個人名 菅原

6月6日 民衆主体性論の構築のためのノート 松田

6月20日 パリ・アニューにおけるselfの表象—

感情、臓器、身体— 栗本

7月4日 <他ならぬ私>と<縁>—「生まれ変わり」の理解のためのメモ—

小田

7月18日 <自己>の観念と権力関係の形成… フィジーの事例 春日

9月19日 パルダ(女性隔離)論再考— 南アジアの女性の主体性をめぐって— 中谷純江(ゲスト)

10月3日 性欲による主体化— 近代日本の子供たち— 川村

12月5日 シンガポールのシャマニズム— 霊媒のセアンスにおける災因論—

根布

Japan's Symbolic Conquest of Taiwan 1849-1945

Timothy Tsu (ゲスト)

ステイタスと職業 班長 前川 和也

共同研究の最終年度にあたる。工業化以前の社会で、それぞれの職業が社会的にどのように評価されていたかにかんして、古典的な身分論をこえる枠組みを構築することをめざした。また同時に、さまざまな分野での「専門」職の成立について討論された。

班員 前川和也 佐々木博光 田中雅一 横山俊夫(以上所内) 服部良久 夫馬進 南川高志(以上文学部) 川島昭夫(総合人間学部) 阿河雄二郎 脇田晴子(以上大阪外大) 井上浩一 大黒俊二(以上大阪市立大) 川北 稔 江川 温(以上大阪大) 河村貞枝(京都府立大) 川本正知(奈良産業大) 小山哲(島根大) 鈴木利章(神戸大) 波多野敏(京都学園大) 早川良弥(梅花女子大) 三成美保(大阪経法大) 森 明子(国立民博) 山辺規子(奈良女子大) 田中俊之(京大大学院)

1994年

1月18日 コンスタンティノーブルの貴金属商、両替商 井上

1月25日 宮廷と騎士 服部

2月1日 信仰としての学問— 歴史家ツフットの興亡 佐々木

4月19日 カーストと現世放棄— セングンダ・

	ムダリヤールとリンガーヤト派	田中雅	範の思考の枠組みの基調低音をなすものとして機能し続けてきた。このような「ダルマ」を中心主題として編纂された文献群が「法典」である。本研究班は、ヒンドゥー社会の行為準則集として成立した古典インド法典の形成期に焦点をあて、重要法典の一つ「ヤージュニャヴァルキア法典」を取り上げ、インド学各分野の専門家の協力のもとに、その文体と内容の分析を行ないつつ、本法典の成立過程と内容の歴史的位置づけを検討を進めてきた。現時点では、本法典の解読作業を終了し、報告論文集の作成に向けて、様々なテーマについての各班員の研究報告にもとづいて議論を進めている。
4月26日	人口という対象 — 政治算術から人口調査へ	阪上孝	班員 荒牧典俊 井狩彌介 藤井正人 船山 徹 (以上所内) 徳永宗雄 御牧克巳 (以上文学部) 赤松明彦 (九州大) 永ノ尾信悟 土田龍太郎 横地優子 (以上東京大) 榎本文雄 (華頂短大) 狩野 恭
5月10日	大学の貴族化 — 18世紀のゲッティンゲン大学	三成	黒田泰司 八木徹 (以上大阪学院短大) 後藤敏文 後藤純子 伏見 誠 (以上大阪大) 島 岩 (金沢大) 正信公章 (追手門学院大) 高島 淳 (東大A A研) 竹中智泰 (常葉学園大) 中谷英明 (神戸学院大) 林 隆夫 (同志社大) 引田弘道 (愛知学院大)
5月17日	ロワゾー『身分論』の世界 — 17世紀フランスの身分社会について	阿河	矢野道雄 (京都産大) 松田祐子 (国際仏教大) 渡瀬信之 (東海大) 乙川文英 杉田瑞枝 山下勤 (以上京都大D.C.) 梶原三恵子 (大阪大D.C.)
5月24日	19世紀フランスの犯罪者観	波多野	
6月7日	帝政期ローマにおける社会的上昇について	南川	
6月21日	『色道小鏡』にみる位付けの円環	横山	
6月28日	西洋中世都市における周縁集団	田中俊	
7月5日	一遍聖絵と被差別民	脇田	
9月20日	中世後期都市のツンフト法・市民法における嫡出の規範		
9月27日	Knut Schulz (ベルリン自由大学)		
9月27日	ヴィクトリア時代の中流階級女性と職業 — 女性雇用協会の歩み	河村	
10月4日	12・13世紀のボローニャのコムーネ、教師、公証人	山辺	
10月18日	中国明清時代、幕友という職業	夫馬	
10月25日	研究方針討論 — 報告書執筆にむけて	全員	知識と秩序(Ⅱ) 班長 阪上 孝
11月1日	土地経営マシンとしてのシュメール「神殿」組織における「職業」とステイタス	前川	1990年から始まった本研究班も最終年度を迎え、これまでの議論の総括、さらに原稿検討会の開催など、研究報告書(近刊予定)の作成作業を進めた。
11月15日	相続契約からみた農民のステイタス	森	班員 上野成利 大浦康介 阪上 孝 富永茂樹 光永雅明 (以上所内) 浅田 彰 (経済研) 木崎喜代治 (経済学部) 石井三記 (東海大学) 市田良彦 (大阪女子大) 小川伸彦 (奈良女子大) 小西嘉幸 (大阪市大) 小林清一 (滋賀県立短大) 西川長夫 (立命館大学) 牟田和恵 (甲南女子大) 水嶋一憲 (関西学院大)
11月22日	医事行為とステイタス	川島	
12月7日	10~12世紀フランスにおける盛土城砦の形態と類型		
12月13日	Michel Bur (ナンシー第二大学)		
12月13日	研究方針討論 — 次期共同研究にむけて	全員	1994年
2月4日	言葉と秩序 — N. ウェブスターとアメリカ英語辞典の編集	小林	
11月18日	原稿検討会	全員	
12月2日	原稿検討会	全員	
古典インドの法と社会	班長 井狩 彌介		
「法(ダルマ)」の観念は、古典インドはもとより現代に至るまで、インド文明の社会秩序と文化規			

近代社会における研究者の組織化 — 研究所・学会・学派

班長 阪上 孝

19世紀も後半に入ると、今日われわれが「研究者」と呼びならわしている人々が大量に出現し、さまざまな「研究所」や、専門的な「学会」「学派」へと「組織化」されてゆく。この現象を個々の研究所・学会等の検討をつうじて解説してゆく、というのが本研究班の基本的な狙いである。初年度の本年は、班員個々の関心にしたが、ヨーロッパ・南北アメリカ・日本におけるさまざまな研究所・学会等の具体的な事例が報告された。次年度以降は、テキスト・リーディングを部分的に交えるなどして、「組織化」にまつわる共通した論点、問題点をさらに明確にしたいと考えている。

班員 上野成利 大浦康介 阪上 孝 田中雅一 富永茂樹 光永雅明(以上所内) 川島昭夫(総合人間学部) 木崎喜代治(経済学部) 崎山政毅(農学部) 佐和隆光(経済研究所) 上山隆大(大阪学院大学) 小林清一(滋賀県立大) 高松 亨(龍谷大学) 富山一郎(神戸市外大) 西川長夫 渡辺公三(以上立命館大学) 牟田和恵(甲南女子大) 水嶋一憲(関西学院大学) 山中浩司(大阪大学) 宇城輝人 前川真之(以上京大大学院)

1994年

- 4月22日 近代における研究者の組織化 — 研究所・学会・学派 阪上
- 5月13日 研究組織の原型 — ベーコンのソロモンの館から 富永
- 5月27日 研究者全体は「組織化」されたのか? — 19世紀後半のイギリスを中心に 光永

- 6月10日 あるドイツの自由な研究所(1) — フランクフルト社会研究所の研究組織と理論形成 上野
- 6月24日 「心理」と「計画」 — アンリ・ド・マンにおける「労働の喜び」の観念をめぐる 宇城
- 9月16日 人文学の危機と文化研究の出現 — 現代文化研究所(CCCS)のロケイション 水嶋
- 10月14日 精神のラボラトリー — ウェスト・

ライディング精神施療院, 1871-76 上山

- 10月21日 Rationalisme politique et démocratie en France (XVIII^e-XIX^e siècles) ロザンヴァロン
- 10月28日 ベルーの国民統合と民族学 — 1920年代のインディヘニスモの周辺 崎山
- 11月11日 ブルッキングス研究所と連邦政府 小林
- 11月25日 ドイツにおける性科学(者)の組織化(1) — 性病問題の社会史的意味 川越
- 12月9日 養生から衛生へ — 明治期日本の公衆衛生 阪上

記号・意味・文学

班長 大浦 康介

文学理論の研究を主目的とするこの研究班は93年4月より3年目に入り、6月以降報告書作成のための原稿検討会を行ってきた。94年度も1月から3月までひき続き原稿検討会を行い、3月末日をもって全日程を終了した。なお報告書は『文学研究とは何か』(仮題)として近く上梓される予定である。

班員 (前年と同じ)

1994年

- 1月10日 原稿検討会 宇佐美・丹治
- 1月31日 “ 大浦・田口
- 3月7日 “ 小西・小倉孝誠(ゲスト)
- 3月14日 “ 山路・齋藤
- 3月22日 “ 山田・宇佐美

人文学のアナトミー

班長 山田 慶兒

グランド・セオリーの有効性が疑わしくなり、人文諸科学の専門化と細分化が進んだ現在、人文学は一つの転機に立っている。この研究会は、この知的な好機をふまえつつ、人文学の方法論を中心とする新しいパラダイムの構築をめざすものである。最終年度をむかえた1993年後半以降は、研究報告書の作成にむけて各自論文の執筆作業にかかり、逐次相互検討を重ねてきた。目下成果報告書を編集中であり、近々出版の予定である。

班員 山田慶兒 井狩彌介 上野成利 宇佐美齋

大浦康介 阪上 孝 佐々木克 佐々木博光 鈴木啓司 田中雅一 谷 泰 富永茂樹 藤井正人 藤田隆則 前川和也 光永雅明 山室信一（以上所内）水嶋一恵

1994年

- 1月25日 人文学のアナトミーのために 阪上
人類学における歴史と構造 田中
2月17日 フランスにおける研究機関の歴史と
現状をめぐる
マリアヌ・バスチド＝ブルギエル
3月1日 人文学と「他者」(Ⅱ) 水嶋

正義システムの諸相

班長 山下 正男

本共同研究班は義務論理学を強力な武器として援用しながら次の三つの順序で正義論の諸体系を研究するものである。(1)正義の観念論的諸体系、(2)正義の法的諸体系、(3)正義の法的諸体系のサバイバル・テスト。

本研究班は以上3項目のうち、(2)を中心テーマとするものである。すなわち各種実定法がいかなる正義をどの程度表現しているのか、また現行の実定法からこぼれ落ちている正義があるとすれば、どのような実定法を新たに追加すべきかが、(2)のテーマである。しかしそうした実定法の背後には、宗教的、哲学的、ユートピア的といったさまざまな観念的正義体系が潜んでいるはずであり、(1)では思いきり拡大された視野によって正義の問題を考察したい。最後に(3)においては、過去の、あるいは現存のいろいろな法体系が、その法体系を受け入れた集団あるいは集団のメンバーを無事に存続させえたか、させえなかったか、またさせうるのか、させえないかに関するテストの可能性を論ずるものである。

班員 山下正男 井狩彌介（以上所内）足立幸男（総合人間学部）小越義雄 川浜 昇 田中成明 山本克己 山本敏三（以上法学部）浜野研三（文学部）阿部昌樹（大阪市大）今井弘道（北大）植松秀雄 江口三角 服部高宏（以上岡山大）亀本 洋（早稲田大）玉木秀敏（大阪学院大）中山竜一（近畿大）平井亮輔（京都工織大）平野仁彦（立命館大）深田三徳（同志社大）松浦好治（大阪大）森際康友（名古屋大）山本顕治（九州大）若松良樹（成城大）

アスキュー・デイビッド 植木一幹 樺島博志 那須耕輔 ノッテジ・ルーク 福井秀樹 耳野健二 毛利康俊

本研究班は平成5年度をもって終了し、平成6年度内に成果を発表する予定である。

東 方 部

六朝美術の研究

班長 曾布川 寛

1990年4月から5年の計画で始まった本研究班は、六朝を中心に後漢、隋唐を含めた時代を扱い、この時代の美術全般についてより精確な理解をめざそうとするものである。具体的な方法としては出土文物、石窟寺院などの仏教美術、書論や画論などの芸術論を三本の柱に取り上げる。今年は班員及び招請研究者による17回の研究発表を行った。また併せて造像記と芸術論の会読を行い、造像記は宝山霊泉寺石窟造像記（大内文雄担当）、芸術論として宗炳『画山水序』、王微『敘画』（曾布川寛担当）、『梁武帝與陶隱居論書啓』（下野健児担当）を取り上げた。

法顯傳研究

班長 桑山 正進

法顯の行歴記は、当時の中央アジア、インドの佛教事情を活寫している。19世紀の佛譯注一例、20世紀初めの英譯注二例があるけれども、いずれもout of dateである。當時は章異『法顯傳校注』（上海古籍出版社、1985）をテキストにとりあげ、その注を読みつつ、これらの諸譯を照合し、また『水經注』の記事を参照して、據るべき現代語譯を作成する。あわせてその内容である5世紀の中央アジアとインドを班員の専門分野である歴史、言語、宗教、考古、美術などの多角視點をもって検討する。班員とその會讀分據は以下のとおり。高田時雄（序から校注説明まで）、森安孝夫（于闐まで）、吉田豊（竭叉から陀歴まで）、春田晴郎（烏菴から弗樓沙まで）、小野浩（那竭から毗荼まで）、定金計次（摩頭羅から沙祇大國まで）、入澤崇（拘薩羅舍衛國から佛般泥洹處まで）、中谷英明（毗舍離から萍沙王舊城まで）、武内紹人（伽那城から多摩梨帝まで）、桑山正進（師子國）、稲葉穰（浮海東還）、船山徹（高僧傳中の法顯、智嚴、寶雲の傳記）、榎本文雄（經錄等）、

本年は桑山分據箇所の中途までを終了した。

中國音韻史の研究

班長 高田 時雄

本研究班は一般の書目には著録されることの稀な明清の韻學関係の書物を取り上げ、序跋や凡例を読みつつ、その資料的性格を闡明しようとするものであり、最終的には『小學考』の補編ともいべき明清の音韻學書の提要の作成を目的とする。2年目にはいった今年度は、以下の資料に関する班員諸氏の報告を得た。

韻略匯通（太田齋）、五方元音（木津祐子）、切韻聲原（佐藤晴彦）、韻表（岡島昭浩）、李氏音鑑（森賀一恵）、新安鄉音字義考正（平田昌司）、西儒耳目資（高田時雄）、韻學集成（淺原達郎）。

前近代中国の法制

班長 梅原 郁

前近代中国の歴史の中で「法律」がどのように形成され展開していったか、また他の歴史世界と比較してどんな特性を持っていたかといった関心のもとに、先秦時代から清代に至るまで幅広く多様な問題を追及している。共通のテキストとしては、新出の敦煌漢簡と、本所が伝統的に研究を進めている敦煌文献の中の法律関係の資料を使用している。

明末清初の社会と文化

班長 小野 和子

今年度はこの共同研究の最終年度であるので、研究報告を中心に研究会を行なった。そのテーマは政治史、社会経済、都市問題、辺境、風俗、思想など多方面に及ぶ。目下、明末清初期の変革に焦点を絞りながら、研究の成果をまとめる予定で準備を進めている。この間、中国社会科学院歴史研究所の周紹泉氏が3月から9月まで、客員教授として来日されたので、3月と7月に6日間、及び4月から6月に至る間、毎週研究会の開始前1時間にわたって、徽州文書、とくにその草書についての講習を行なった。

中国技術史の研究

班長 田中 淡

本研究班は、1991年4月から向こう5箇年の豫定で、中國の傳統的技術の特質について、とくに生活科學・技術の関連分野を主たる対象としてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするものである。当

面、研究会は技術史全般に関わる分野を主として、関連の特定分野を副とする2本だての構成をとり、前者は元・王禎の「農書」、後者に梁啓雄輯「哲匠録」景山篇をそれぞれテキストに選び、會讀・譯注作成をすすめてゆく豫定である。また、それと並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を随時おこなってゆく。標記の期間に、王禎『農書』農器図譜・倉廩門、鼎釜門、錢鏹門、舟車門、漕漑門の訳注を中島長文、白杉悦雄、武田時昌、黄蘭翔が担当した。

中国古代礼制研究

班長 小南 一郎

5年計画で開催された本研究班は、1994年3月をもって終了した。主要な作業であった「周礼」春官篇を賈公彦の疏で読み、その経文および鄭玄注に訳注を施す仕事は、大ト職まで進み、春官篇の半分強を読了したことになる。こうしたテキストの輪読と並行して、班員による次のような研究報告が行われた。

1月25日 深衣の復元について 相川佳代子

2月22日 齋と醮 麦谷 邦夫

なお、本研究班の成果は、各班員の研究報告論文を纏め、『中国古代礼制研究』の題で、1995年春に出版される予定である。

中国の礼制と礼学

班長 小南 一郎

本研究班は、昨年度まで開催されてきた「中国古代礼制研究班」の成果を引き継ぎつつ、新しく班員の編成換えを行ない、本年度より5年計画で発足したものである。方法論としては、中国の礼に関する古典的なテキストを綿密に読み、それに注釈を施こしつつ、実際の場における儀礼のありかた、およびそれについての經学的な議論の意味を、時代的、社会的な環境の中で考えようとするものである。テキストとしては、前回の研究班を引き継いで、「周礼」春官篇を、賈公彦の疏によりつつ読み、その経文および鄭注に訳注を施こした。本年度に読んだのは、雲氣や夢による占いなどト占に関わる部分と、神祇官である大祝の職務についてである。

六朝道教の研究Ⅱ

班長 吉川 忠夫

『真誥』7篇全20巻の会読をひき続いて行い、第15巻・第16巻闡幽微篇1・2、第17巻握真輔篇1の訳注を完成した。残すところは、1巻だけとなった。

秦漢隋唐の文物資料

班長 浅原 達郎

本研究班では昨年に引き続き、隔週水曜日の研究会で出土文物に関する班員の研究発表が行なわれた。

文獻と情報

班長 勝村 哲也

1994年4月から5ヶ年計画で本研究班は始まった。文獻班と情報班に分かれる。文獻班では、中國文獻學・目録學の流れを跡づけ、その提要の編纂を目的の一とするが、当面は各自の関心に従った研究報告に重点を置いているのであって、本年度は特に班員以外から報告を願って、文獻研究の現状が那邊にあるかを探ろうとした。情報班では、内外の漢籍データベースの集積と漢籍電算化のための基本的な周邊・応用ソフトウェアの開発に眼目を置くが、本年度は特に京都大学大型計算機センター研究開発部の業績の継承と岩崎宏之氏を領域代表者とする重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」との有機的な対応とを追求した。

梁啓超の研究

— その日本を媒介とした西洋近代認識について —

班長 狭間 直樹

昨年度より3カ年の予定で開始した「梁啓超の研究」は、中国の近代世界認識形成、および近代西洋学術文化の摂取に多大な貢献をした梁啓超の役割に主眼をおいて研究しようとするものである。そのさい、かれが近代西洋認識の過程で主たる媒介として依拠した同時代の日本からうけた影響に意をはらい、伝統的社会に育ったかれの認識がいかに関与したのかを、多面的かつ世界的視座にたって検討していくことが必要となるだろう。本年度はかれとそのマスコミ論、史論、経済論、仏教論、文学論、学術論等の変遷にかんして、各班員の研究報告を検討することを中心として研究班をすすめた。

中国近代の都市と農村

班長 森 時彦

昨年度から5年計画でスタートした本研究班は、都市と農村の関係を主軸にすえて、中国近代史を長いタイムスパンで縦断的にとらえなおし、前近代から現代にいたる中国社会の変動を巨視的に分析する視座の獲得をめざしている。本年度は、行政、税制などの側面から都市と農村の問題にアプローチする報告が多くを占めた。とくに広州と奉天、南北両端の都市を警察行政という同じ観点からとりあげた二つの報告、伝染病流行の動向から抗日戦争期の中国社会を分析した報告、四川省郫県、達県農村の実地調査にもとづく報告など、従来になく新しい視角からの研究の萌芽がみられることは特筆に値する。

北朝後半期佛教思想史研究

班長 荒牧 典俊

北朝後半期から隋唐期にかけての激しい歴史的変動の中において、仏教思想とは何であって、どのような歴史的役割を演じたか、そこから、どのようにして隋唐の浄土・禪思想運動が成立していくのか、といった根本問題が、いまだ、ほとんど解明されていないように思う。本研究班は、敦煌石室に残された写本の中から、その時期のなまの史料ともいふべき諸写本を選び出し、校定、訓読、注解して学界に提供することを、第一の目的とする。それらの、いわば眠っていた史料を活用して、北朝後半期仏教思想史の具体的な過程を解明することを第二の目的とする。本年度より、5ヶ年を予定している。

客 員 部 門

東アジアの日常における両界媒介事象の研究

班長 三浦 國雄

本研究班では、存在（ヒト・モノ・コト）をそれ自体として孤立的に捉える見方を排し、実としての存在を成り立たせる虚としての＜媒介者＞に注目し、その視点から東アジアの社会と日常を見直したいと考えている。このような視点の設定によって、存在が媒介者となり、媒介者が存在に転じるという、虚実の定まらないアジア的なマンダラの世界をよりダイナミックに捉えうるのではあるまいか。

本年（初年度）は、研究分野も方法も異なる班員が、それぞれの立脚点から手さぐりで＜媒介＞を語っ

たが、次年度からは、さらに大胆に＜媒介＞に踏み込む予定である。研究会の進め方としては、資料輪読と研究発表形式とを併用している。資料として、本年前半は貝原益軒の『日記』を読んだ。目下、『簗簗内伝』と格闘中である。

班員 井波陵一 木島史雄 金文京 齋藤希史
塚本明 藤井正人 藤田隆則 三浦國雄 横山俊夫
リチャード・ルービンジャ（以上所内） 藤井讓治
（文学部）ミヒャエル・キンスキー（同志社大）
都築晶子（龍谷大）西山克（京教育大）羽賀祥二
（名古屋大）深澤一幸（大阪大）

1994年

- 4月23日 益軒『日記』元禄元年正月 横山
『玉匣記』の媒介性 三浦
5月7日 益軒『日記』元禄元年正月 藤井讓
供儀としてのコメディ・アクター
— 柳田国男の理論をめぐって—
マーガレット・ウエルス
5月18日 益軒『日記』元禄元年2月3月 深澤
地獄を絵解く—『熊野観心十界図』
の言説を復元する— 西山
6月1日 益軒『日記』元禄元年4月 羽賀
『大ざつしよ』考 横山
6月11日 益軒『日記』元禄元年5月 塚本
六朝時代の喪服マニュアル 木島
6月29日 益軒『日記』元禄元年6月7月8月 三浦
片山兼山論 キンスキー
9月24日 益軒『日記』元禄元年9月10月 都築
西湖マンダラ 金
10月5日 益軒『日記』元禄元年11月12月 齋藤
雅俗共賞—『紅樓夢』に見える遊
びから— 井波
10月15日 中村璋八校『簗簗内伝』序 木島
林住者考—俗と聖のはざま—
藤井正
10月29日 正保4年版『簗簗抄』由来 西山
19世紀日本の石碑文化 羽賀
11月16日 中村校『簗簗内伝』巻第一 金
蔡温の儒学思想について—『要務彙
編』をめぐって— 都築
11月26日 神道大系本『簗簗内伝』巻第一

藤井讓

時を刻む—日本近世の都市空間に

おける— 塚本

12月3日 正保4年版『簗簗抄』註 三浦

能におけるツレと多人数合唱

—媒介のひとつとして— 藤田

Ⅱ 個人研究

日 本 部

- 日本ファシズムの研究 古屋 哲夫
日本近代文化史の研究 飛鳥井雅道
廃藩置県の研究 佐々木 克
植民地経済の研究 山本 有造
文化史および文明史としての国民国家の形成
横山 俊夫
日本近世社会における政治権力 藤井 讓治
政治文化の中の社会理論 山室 信一
近代朝鮮の政治と社会 水野 直樹
日本近世の地域社会の研究 塚本 明
士族の研究 落合 弘樹
文学と近代 齋藤 希史
貨幣の研究 安富 歩

西 洋 部

- 西洋論理想史 山下 正男
社会的相互行為の解読 谷 泰
思想と制度 阪上 孝
シュメール行政・経済文書の研究 前川 和也
インド世界の儀礼の研究 井狩 彌介
フランス散文詩の研究 宇佐美 齊
群衆現象の社会学 富永 茂樹
南アジアにおける宗教と社会 田中 雅一
文学理論の研究 大浦 康介
後期ヴェーダ文献の成立史研究 藤井 正人
—ブラーフマナからウパニシャッドへ—
デカダンス文学における自己矛盾の研究 鈴木 啓司
音声形式の記述と分析 藤田 隆則
フレデリック ハリソンとイギリス実証主義
光永 雅明
ドイツ中世のエトノス 佐々木博光

フランクフルト学派の政治思想

上野 成利

事業概況

東 方 部

夏期公開講座

宋代の官僚制度	梅原 郁	1994年 7月	於 本館大会議室
六朝隋唐精神史	吉川 忠夫	—コミュニケーションにドラマをみる—	
隋唐政治社会史研究	礪波 護	8日 会話のトピックはいかにつくられていく	
五四時期中国社会主义の研究	狭間 直樹	か	串田 秀也
インド亜大陸北西地方の歴史考古学研究		禅問答	吉川 忠夫

	桑山 正進	9日 笑いの本地・笑いの本願	谷 泰
古代中国における説話伝承の研究	小南 一郎	フィクションとは何か	大浦 康介

東林党の研究

小野 和子

原始佛教起源論

荒牧 典俊

開所65周年記念公開講演会

中国美術の様式と意味

曾布川 寛

1994年11月17日

於 本館大会議室

中国建築の様式・技法・空間

田中 淡

ミメシスの政治学—『啓蒙の弁証法』の思

中国中世土地所有制の研究

勝村 哲也

想圏

上野 成利

六朝道教思想研究

麦谷 邦夫

貝原益軒—内向きの宇宙

横山 俊夫

近代中国の綿紡織業

森 時彦

『世説新語』の美学—才から情へ

小南 一郎

敦煌寫本の言語史的研究

高田 時雄

中国古代中世の法制

富谷 至

研究成果の刊行

先秦時代の金文

浅原 達郎

I 紀 要

中国の小説、演劇及び講唱文学の演変

金 文京

人文学報 第73号

清代文化史研究

井波 陵一

中国古代文明の形成と発展

岡村 秀典

天保期国訴の組織過程—大和川筋剣先船国訴をめ

漢唐間における天文学と文化

新井 晋司

ぐって—

谷山 正道

イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北インド

稲葉 稜

家と地域をみる眼—渡辺華山『訪廬録』の世界—

羽賀 祥二

唯識思想研究

船山 徹

長州藩元治内乱における鎮静会議員と干城隊

岸本 寛

中国共産主義運動の歴史と思想

石川 禎浩

唐宋時代の士人

中砂 明德

家茂の参内と勅語—慶応元年夏の場景—

宋元道教研究

横手 裕

青山 忠正

明清時代の官僚制度

谷井 陽子

赤報隊の結成と年貢半減令

佐々木 克

六朝時代學術史の研究

本島 史雄

明治10年代における秋田県農業の技術段階

中国の伝統的品詞観

森賀 一恵

勝部 真人

中国仏教美術の研究

稲本 泰生

帝国議会における秩禄処分問題—家禄賞典禄処分

高麗及び朝鮮官僚制の研究

矢木 毅

法制定をめぐる—

落合 弘樹

尾崎行雄文相の共和演説事件—明治期不敬事件の
一事例として—

小股 憲明

人文学報 第74号

魂と神についてのヨーロッパ的奇想

山下 正男

明治前期の陸軍下士と自由民権

落合 弘樹

1930年代台湾の台湾人企業家・試論 やまだあつし
寛永11年の領知朱印改と「寛永御朱印」 藤井 譲治
彙 報 (1993年1月～1993年12月)

東方學報 第66冊

漢代の祖霊観念 小南 一郎
劉後村と南宋士人社会 中砂 明德
元朝の審判機構と審判程序 陳 高華
ガズナ朝の「王都」ガズナについて 稲葉 穰
『大唐天竺使出銘』及其相關問題的研究 霍 魏
ソグド文字で表記された漢字音 吉田 豊
李義山七律集積稿(8)「李義山七律集積」研究班
舊五代史, 遼史, 金史刑法志訳注稿
「中國近世の法制と社会」研究班
荒井 健教授著作目録
彙 報 (1993年1月より1993年12月まで)

ZINBUN (欧文紀要) No.28

Shigeki TOMINAGA, L'impossible groupement
intermédiaire
— été-automne 1791 —
Jean BELLEMIN-NOËL, Femmes de feu dans
Les Eaux étroites de Gracq
Noritoshi ARAMAKI, Some Precursors of the
Subconscious Desire in the Attadaṇḍasutta
INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES,
STAFF AND SEMINARS :1993

II 研究報告その他

中国語史の資料と方法 高田時雄編
1994年3月31日刊
近代日本のアジア認識 古屋哲夫編
1994年3月31日刊
A STUDY OF THE NĪLAMATA
— ASPECTS OF HINDUISM IN ANCIENT
KASHMIR — 井狩彌介編
1994年3月31日刊
近世前期政治的主要人物の居所と行動 藤井譲治編
1994年3月31日刊
所報「人文」第40号
1994年3月31日刊

所 員 動 静

- ・古屋哲夫(日本部)教授は、停年退官(3月31日付)、京都大学名誉教授の称号を授与(4月1日付)。
- ・山下正男(西洋部)教授は、辞職(3月31日付)、京都大学名誉教授の称号を授与(4月1日付)。
- ・三浦國雄大阪市立大学教授は、客員教授(日本部)。(比較文化研究部門, 4月1日～1995年3月31日)。
- ・串田秀也大阪教育大学助教授は、併任助教授(西洋部)。(比較文化研究部門, 4月1日～1995年3月31日)。
- ・曾布川 寛(東方部)助教授は、教授に昇任。
- ・田中 淡(東方部)助教授は、教授に昇任。
- ・佐々木 克(附属東洋学文献センター)教授は、当研究所教授(日本部)に配置換。
- ・藤井譲治(日本部)助教授は、文学部助教授に配置換。
- ・金 文京慶應義塾大学助教授を、助教授(東方部)に採用。
- ・岡村秀典九州大学助教授は、当研究所助教授(東方部)に転任。
- ・井波陵一滋賀大学助教授は、附属東洋学文献センター助教授に転任(以上4月1日付)。
- ・田中雅一助教授(西洋部)は、委任経理金により、2月23日広島発、アンナマライ大学、マドラス大学、シンガポール大学に於いて食文化に関する調査及び文献資料蒐集を行い、3月18日帰国。
- ・前川和也教授(西洋部)は、委任経理金により、2月28日大阪発、大英博物館に於いてシュメール粘土板に関する研究、ワルシャワ大学に於いてポーランド楔形文字研究の現状及び所蔵粘土板調査を行い、4月4日帰国。
- ・高田時雄助教授(東方部)は、3月10日大阪発、ペンシルヴァニア大学に於いて「中世白話に関する国際学会」出席、ローマ教皇庁図書館に於いてキリシタン中国語学に関する文献資料蒐集を行い、4月12日帰国。
- ・梅原 郁教授(東方部)は、3月22日成田発、大英博物館に於いて敦煌遺物に関する調査及び研究打ち合わせを行い、3月29日帰国。

- ・高田時雄助教授（東方部）は、5月30日大阪発、国家文物局、新疆ウィグル自治区博物館、甘肅省博物館等に於いて中国語史関連文物の調査を行い、7月6日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、6月6日福岡発、社会科学院考古研究所、河南省博物館等に於いて黄河流域と長江流域の墓制の比較研究を行い、6月21日帰国。
- ・梅原 郁教授（東方部）は、6月15日大阪発、エルミタージュ美術館、ロシア科学院図書館、フィンランド国立美術館、スウェーデン東洋美術館・国立民族学博物館に於いて中央アジア将来の文物に関する研究資料の蒐集を行い、6月22日帰国。
- ・前川和也教授（西洋部）は、委任経理金により、7月7日大阪発、大英博物館に於いてシュメール楔形粘土板文書の研究を行い、8月31日帰国。
- ・田中 淡教授（東方部）は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金により、7月17日大阪発、国家文物局に於いて大明宮含元殿日中共同保存事業に係る調査打ち合せ、大明宮遺址に於いて同事業に係る現地調査を行い、7月23日帰国。
- ・谷 泰教授（西洋部）は、7月21日成田発、大英博物館に於いて動物学系・主任研究員クラットン ブロック氏と家畜化の過程についての意見交換及び文献資料の蒐集、イタリア・ベルガモ県にて出生時の母子関係介入技法についてのデータ蒐集を行い、8月26日帰国。
- ・金文京助教授（東方部）は、7月27日大阪発、雲南省文化庁に於いて「儺戲儺文化国際學術研討会」出席、貴陽市評劇団、復旦大学古籍研究所に於いて中国演劇に関する資料を収集し、8月15日帰国。
- ・金文京助教授（東方部）は、8月25日大阪発、ソウル大学に於いて「第14次中国学国際學術会議」出席、慶州博物館に於いて古代日韓関係についての資料収集、海印寺に於いて高麗大藏経についての資料収集を行い、8月31日帰国。
- ・梅原 郁教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月29日大阪発、大英博物館及びスウェーデン民族学博物館に於いて中央アジア出現簡牘他法制文書に係る資料調査を行い、9月22日帰国。
- ・富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月29日大阪発、大英博物館及びスウェーデン民族学博物館に於いて中央アジア出現簡牘他法制文書に係る資料調査を行い、9月22日帰国。
- ・狭間直樹教授（東方部）は、9月4日大阪発、近代史研究所、第一歴史檔案館、北京図書館、北京大学、中国人民大学に於いて国民革命に関する研究資料蒐集及び学術交流を行い、9月16日帰国。
- ・井狩彌介教授（西洋部）は、委任経理金により、9月8日大阪発、タミル・ナードゥ州政府東洋写本図書館、アドヤール図書館、ケーララ大学東洋学・写本図書館、ケーララ州イリンジャラクダ在住のヴェーダ・ブアードゥーラ学派伝承の継承者パラメーシュヴァラム・ナンブーディリ氏宅に於いてヴェーダ文献写本の調査と資料を収集し、9月27日帰国。
- ・高田時雄助教授（東方部）は、委任経理金により、9月28日大阪発、パチカン図書館に於いてクリンタン中国語学に関わる資料蒐集を行い、10月12日帰国。
- ・麦谷邦夫助教授（東方部）は、委任経理金により、10月30日大阪発、北京社会科学院、八仙呂、上海社会科学院、福建社会科学院、香港大学、故宮博物院に於いて道教文化と食物禁忌に関する資料蒐集及び現地調査を行い、11月20日帰国。
- ・桑山正進教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月30日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、11月27日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月30日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、11月27日帰国。
- ・稲葉 稜助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月30日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、11月27日帰国。
- ・船山 徹助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月30日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡

人 文 学 報

に関する調査を行い、11月27日帰国。

- 曾布川 寛教授（東方部）は、委任経理金により、11月6日大阪発、北京大学、故宮博物院、山東省博物館等に於いて中国美術に関する研究資料調査及び資料蒐集を行い、11月20日帰国。
- 狭間直樹教授（東方部）は、11月19日大阪発、国立中央図書館に於いて「孫文創立国民党100周年

学術討論会」に出席、近代史研究所に於いて国民革命及び梁啓超に関する研究資料蒐集を行い、11月27日帰国。

- 岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、12月7日大阪発、蘇州市草鞋山遺跡に於いて先史時代水田の発掘調査を行い、12月13日帰国。